適切に恐れる

福岡産業保健総合支援センター
産業保健相談員　藤代一也

コロナ禍、聞いたことはないだろうか？もともとは、寺田寅彦の小爆発二件という随筆の引用で―ものをこわがらなすぎたり、こわがりすぎたりするのはやさしいが、正当にこわがることはなかなかむつかしい―という一節を、感染症専門の先生方が 2009 年の新型インフルエンザ流行時に紹介され、そこから広がった言葉だ。
昭和１０年８月の朝、寺田が軽井沢のホテルで朝食中に突然爆発音を聞く。浅間山の噴火だ。慌ててホテルをチェックアウトしたら、灰が降り始めた。わずかな量だけど、周囲の光景が不思議な清涼の雰囲気に包まれていた、と書かれている。ここはさすがに文筆家の表現である。帰京しようと沓掛駅に行くと、いままさに浅間山から降りてきた学生を捕まえて、駅員が爆発当時の様子を訊いている。その学生は、なになんでもないですよ、大丈夫ですよ、とさも請け合ったように言うのに対して、駅員は急に厳かな表情をして、静かに首を振りながら、いやそうでないです、そうでないです、いやどうもありがとう、と言ったという話で、ここからさっきの、正当にこわがることはなかなかむつかしい、となる。
ちなみに、浅間山噴火は昭和１０年代は大きな被害はなかったけど、昭和２０年代には噴石で１０人以上亡くなったりしている。もちろん、過去には江戸時代には１回の噴火で１０００人以上亡くなったりしているのだ。
　歴史は巡るし、人類は言う程賢くないようだ。